

『ホロコーストと戦後ドイツ—表象・物語・主体』[高橋秀寿 著]
(岩波書店, 2017年)

武井彩佳

ホロコーストほど、現代社会に表象があふれる歴史事象はないだろう。直接には関係のなかった日本でさえ、ホロコーストを扱う映画が毎年必ず数本は公開され、関連書籍は数知れない。ドイツ現代史関連の本を売るためには、ヒトラー／ホロコースト／アウシュヴィッツのどれかをタイトルに入れ、装丁はハーケンクロイツをイメージして赤地に黒が定番と、どこかの出版社の編集者から聞いたことがある。きわめて固定化され、汎用化されたイメージが私たちにすり込まれている。ホロコーストと聞いて、アンネ・フランクがほほえむ写真や、アウシュヴィッツの線路とレンガ造りの監視塔をイメージしない人はいない。

こうした中で高橋秀寿による本書は、ドイツ連邦共和国におけるホロコーストの表象の変遷を追い、悲劇から40年以上たった後にホロコーストが社会に氾濫するにいたるのはなぜかという疑問に答えようとするものである。戦後、ユダヤ人の虐殺はどのように語られてきた／こなかったのか、これを語る「犠牲者」「加害者」の主体とは誰であったのか、そしてこのような語りを通して戦後のドイツの「国民的主体」が形成される過程を分析する。

まず、本書の位置づけである。ホロコーストの表象とナラティブ（語り）がどのようにドイツ社会に影響を与え、これが国家的アイデンティティといかに関係しているのかという問いは、正面からはなかなか扱いにくいものである。なにせ、ドイツ社会には写真・映画・小説・舞台など、ホロコーストの表象は限りなく存在し、まさに「扱うには広すぎ、また困難」だ⁽¹⁾。さらに表象やナラティブといった「ソフト」なレンズを通して、社会・経済といった「ハード」の変化を考察するには、実証的歴史学のアプローチはあまり適さない。そうすると、表象の影響や作用をいかに測るか—世論調査か、新聞記事か、議会での議論か—といった問いに対する答えも自明ではない。まさにこういった困難と葛藤しつつ執筆されたのが本書であり、この広大なテーマを包括的に取り上げる研究がよいよれたことで、われわれは大海をゆく羅針盤を得たと言って良いだろう。

第一章「ホロコーストの発見と反応」では、終戦から1950年代におけるホロコーストの語り分析される。そこでは異なるナラティブが拮抗し、勝者アメリカは「解放者・告発者・刑罰者」としてのアメリカ人、「加害者・罪人・被告人」

(1) 高橋秀寿『ホロコーストと戦後ドイツ—表象・物語・主体』(岩波書店, 2017年), 216頁。

としてのドイツ人、そして名もなく、民族的属性にも言及されない無数の「受動的犠牲者」、この三者の関係性の中でホロコーストを語ったという。対して「集団の罪」を背負われたドイツ人は、自分たちはナチズムの犠牲者であるという対抗的な語りで「犠牲者共同体」の中に引きこもった⁽²⁾。犯罪者である一部のナチを非国民化したため、ドイツ国民は歴史的な自己理解の中に「加害者としても、犠牲者としても、解放者としても」ホロコーストを位置づけることができなかったという⁽³⁾。

ところが、1950年代に入ると、『アンネの日記』がドイツでもベストセラーになっている。それはなぜか。この本が世界的に受け入れられたのは、「私は人間の善を信じます」というアンネの言葉に表されるように、彼女の物語がユダヤ人であるゆえの特殊な事情を超越し（つまり脱民族化、非ユダヤ化され）、普遍化されて、思春期の少女の未来志向の物語として解釈されたためだとする。日記に加害者としてのドイツ人はほとんど登場せず、「ホロコーストの犯罪からナショナリティが薄められ、「悪」もまた脱歴史化」されたゆえに、アンネは共感できる人物となったと、ブームの心理的な背景が説明される⁽⁴⁾。

第二章、「1960年代以降におけるホロコーストの記憶・表象・物語」では、写真・映像・ドキュメンタリー等にみられるこの時代のナラティブが分析される。

要約すると、この時代はホロコーストがテーマ化されるようになり、若い世代に対する啓蒙という点では前進したが、ドイツ人自らのナチズムへの支持や、ユダヤ人迫害への関与を追求し内省するには、まだその主体が形成されていなかったということだろう。ナチ体制は絶対的な権力者であるヒトラーとその側近がイデオロギーを実現したものというナラティブが支持されたため、犠牲者は普遍化され具体性を失う一方、ドキュメンタリー『第三帝国』（1960年より放映）がそうであったように、加害者はごく一部の人間に限定される。当時反響を呼んだドラマ、『ユルゲン・ヴィルムスの日記』では、主人公の国防軍兵士はユダヤ人虐殺を目撃し葛藤するものの、「清潔な国防軍」の神話そのままに、虐殺の責任は一部のSS集団に帰されていた⁽⁵⁾。

ただし、1960年代は司法による過去との取り組みが前進した時代でもある。フランクフルト・アウシュヴィッツ裁判の報道とその余波の分析では、ユダヤ人の虐殺はジェノサイドとしてではなく、「小物」の犯罪者による個々の虐待や殺害の事例に矮小化されてしまい、国民は逸脱者である加害者に自己を同一化するこ

(2) 高橋『ホロコーストと戦後ドイツ』、10-22頁。

(3) 高橋『ホロコーストと戦後ドイツ』、208頁。

(4) 高橋『ホロコーストと戦後ドイツ』、46頁。

(5) 高橋『ホロコーストと戦後ドイツ』、74頁。

とはなかったという⁽⁶⁾。つまり加害主体をめぐる語りでは、責任が局地化され、大半の市民にはユダヤ人の死は自分に「関係のない」ことになった。

これは一面においては正しいが、もう少し踏み込んで考える必要もある。フランクフルトでの裁判の前後には、東部の絶滅収容所の関係者や大量銃殺の実行者に対する裁判が複数あり、「普通の人びと」が行った「普通でない」犯罪が次々と明るみに出ていた⁽⁷⁾。一部の犯罪者が悪魔化され社会の「異物」とされたとしても、そのような線引きに通底していたのは、「普通の人びと」も何かのきっかけでナチ犯罪人となり被告席に立ち得たという、潜在的な共犯共同体の一員としての居心地の悪さではなかっただろうか。

歴史学的には、こうした過去との地道な取り組みが1960年代末の地殻変動の下地を作ったとされてきたが、興味深いことに高橋は、学生運動をナラティブの転換点とは位置づけていない。むしろ68年世代による過去への取り組みの欺瞞を指摘し、「68年」運動においてナチ体制に対する歴史的関心は、主にその担い手の弾劾のために喚起され、その犠牲者に向けられることはなかった」と断じている⁽⁸⁾。政治闘争の材料でこそあれ、ここで犠牲者は無名の集合でしかなかったという。

学生運動でなければ、何がドイツのナラティブを変えたのかという問いが浮かぶ。第3章では、流れを根本から変えるものとして1979年のアメリカのTVドラマ『ホロコースト』の影響が分析される。放映時の状況や寄せられた意見、世論調査などを丁寧に見てゆくことで、このドラマがドイツでどれほどの衝撃をもって受け止められたのかが明らかにされている。高橋はこのドラマがドイツ人を犠牲者の側に強く自己同一化させ、ホロコーストを国民的記憶に刻んだという。したがってここには国民主体の語りのひとつの転換が指摘されるが、このドラマがそれほどの影響力を持ち得た理由は、これがそれまでとは異なる物語構造を持っていたためだという。ここでは犠牲者／加害者の二極が設定され、第三者である傍観者が不在であったため、ドイツ人は犠牲者に感情移入しつつも、自身がドイツ人であることを忘れることはできず、このため同時に羞恥心と歴史的責任を感じた。これによりドラマの『ホロコースト Holocaust』はドイツの歴史の一部である「ホロコースト Holocaust」へと変化したと解釈する。

(6) 高橋『ホロコーストと戦後ドイツ』, 93-94頁

(7) 例えば以下のような研究を参照: Andreas Eichmüller, *Keine Generalamnestie. Die Strafverfolgung von NS-Verbrechen in der frühen Bundesrepublik*, München: Oldenbourg, 2012; Jörg Osterloh/Clemens Vollnhals (Hrsg.), *NS-Prozesse und deutsche Öffentlichkeit. Besatzungszeit, frühe Bundesrepublik und DDR*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2011; Michael S. Bryant, *Eyewitness to Genocide. The Operation Reinhard Death Camp Trials, 1955-1966*, Knoxville: UP Tennessee, 2014.

(8) 高橋『ホロコーストと戦後ドイツ』, 100-101頁。

高橋はこうしたドラマが商業的な成功をおさめる下地がドイツ社会にあったと指摘する。ドイツ社会に新しいナラティブを支えるような社会経済的な構造変化がすでに起きつつあり、このポテンシャルが優れたマーケティング戦略により引き出され、『ホロコースト』現象が起こったとする⁽⁹⁾。つまり、これが次の章で詳しく見るポストフォーディズムへの移行である。

最終章の第4章「ホロコースト・モデルの確立と国民形成」において、ホロコースト・ブームとポストフォーディズムの関係性が論じられる。ヘーゲル、フーコー、アガンベン、ドゥルーズなどの思想に言及しつつ論が進められるため、その関連性は何度も咀嚼しないと飲み込めない。このため、多少細かく本書での議論を追ってみよう。

高橋はフォーディズムを「市場を組織に従属させることで市場原理が内包する偶然性を処理し、生産と消費を計算可能なものとして長期的な計画によって実行する体制」と定義し、これに対しポストフォーディズムは、ネットワークやコミュニケーションを駆使して市場の要求にフレキシブルに対応し、サービスを売るという⁽¹⁰⁾。ここにおいては市場を管理・組織する規律の形成は目的とされず、むしろ市場の偶然性こそが組織原理となる。

社会経済がこうした体制に移行する中で、歴史的意識も変化する。フォーディズムの管理された生産・消費の時代に支持されていた「世界史的個人」の英雄物語による歴史意識は魅力を失い、ポストモダニズムで言うところの「大きな物語」の喪失が起こる。歴史は直線的ではなく、逆に人間を翻弄するものとみなされるようになり、「世界史的個人」が歴史をつくってゆく際に踏みつぶす花のような、「受動的犠牲者 (victim)」に共感が寄せられるようになるという。そしてこの「受動的犠牲者」の代表が、ホロコースト犠牲者だという。彼らは7月20日事件のシュタウフェンベルクのような「能動的犠牲者 (sacrifice)」とは異なり、強制収容所でやせ細って死んでゆく、犠牲化不可能だが殺害可能な、したがって例外的状態に置かれた「ホモ・サケル」(アガンベン)である⁽¹¹⁾。

では、アウシュヴィッツの「回教徒」と呼ばれた人々のように、痩せ細り、半ば死んでいるかの状態で受動的に生き続け、また生き残ることが唯一の目的となった人間への共感を通して、いかなる歴史的主体が形成されるのか。高橋は6つの主体による「ホロコースト・モデル」が確立したという。それらは1. 受動的犠牲者が能動的犠牲者へと主体を転換させる物語、2. 受動的な死を拒否し、抵抗して尊厳ある死を選択する物語、3. 子供の目を通しホロコーストの非人道性と残虐性を強調する物語、4. 脱出と逃亡・潜伏の物語、5. 犠牲者が機転を

(9) 高橋『ホロコーストと戦後ドイツ』, 124頁。

(10) 高橋『ホロコーストと戦後ドイツ』, 179-181頁。

(11) 高橋『ホロコーストと戦後ドイツ』, 176-177頁。

利かし、相手の裏をかくことで生き残りを図る物語、6. ト라우マに特徴付けられる物語、この6つである。この6つのモデルに従って終戦前後のドイツ人の悲劇——追放や爆撃、集団レイプなど——も想起されるようになり、それに伴って国民主体が再編成されたと高橋はいう。つまり、「ホロコースト・モデルは、国民主体を構成していくモデル」なのだ⁽¹²⁾。

社会の変化をナラティヴ・モデルの変遷から読み解き、ホロコーストの氾濫をドイツの歴史的自己理解という大きな流れの中に示す点が本書の強みである。ただし、「なぜ」80年代以降にホロコースト・ブームがおこったのかといったきわめて大きな問いには、必然的に大きな答えで返さざるを得ず、高橋によればそれが「ポストフォーディズム体制への移行」ということになる。だがポストフォーディズム体制が確立すると、計画性・効率重視のフォーディズムの時代に有効であった「世界史的個人」の物語が失墜し、逆にアウシュヴィッツの回教徒のような受動的犠牲者が世界史的主体となり、国民が形成されるという必然性は容易には理解しにくい。また、受動的犠牲者が前面に置かれる一方で、加害主体はいったいどこに行ってしまったのかという疑問も残る。加害者不在のナラティヴにより、現在の国民主体が形成されたということなのか。そうすると、ドイツ国民とはいったい誰なのか。

他方、評者は自著『〈和解〉のリアルポリティクス』(2017)において、本書とは異なる観点からホロコースト・ブームの背景を分析した⁽¹³⁾。それが本書の書評を依頼された理由かと思われるが、高橋が表象やナラティヴという社会と人の内面に働きかける面から、つまり「ソフト」面からアプローチしたのに対し、評者は政治・外交・軍事など、いわば「ハード」面からアプローチした。その意味で両書は互いに欠ける部分を補う関係にあると言って良く、併せて読むことでホロコースト・ブームの背景がより深く理解されるのではないだろうか。

最後に、現在のドイツにおける語りの主体は誰か。そのナラティヴはいかなるものなのか。最近の一部のドイツの右傾化は、ホロコースト・モデルで歴史主体が説明される時代の終わりを告げているように思う。「無垢な犠牲者」のナラティヴは過去の解釈としての規範性を維持できなくなっており、ナラティヴを共有しない集団の存在がますます目につくようになってきている。では、これからどのような語り共有されていくのか——本書はこの新しい問いもわれわれに投げかけている。

(12) 高橋『ホロコーストと戦後ドイツ』, 204頁。

(13) 武井彩佳『〈和解〉のリアルポリティクス—ドイツ人とユダヤ人』(みすず書房, 2017年)。